



Vol.40 福岡

コロナ禍だからこそ、 図画工作科の学習を

写真と文・北九州市立竹末小学校 校長 外山 典子
(第80回全国教育美術展 運営委員)

スクールアート 風土記



② 大きな作品も「密」になるのを防ぐために各自の席で取り組んでいる



① 昨年度の「ミュージアム・ツアー」
(作品に触れながら楽しんでいる)



⑤ 学校のあらゆる場所にある児童作品をじっと見つめ、
自分の表現に取り入れようとしている児童



④ ソーシャルディスタンスを保ちながら
自分の作品と向きあっている



③ 校庭に出て、自分の「お気に入りの場所」を
探しているところ

北九州市には、戸畑区の森の中に著名な建築家である磯崎新氏が設計した「北九州市立美術館」(丘の上の双眼鏡)があります。所蔵数も西日本一と多く、北九州市の誇るべき美術館です。また、本市の教育大綱に、「本市に誇りをもつ子ども」「文化芸術に触れる機会の充実」が掲げられています。

そこで、美術館の協力を得て、3年前から、市内の小学3年生を対象とした、美術鑑賞事業「ミュージアム・ツアー」を行っています。

この事業は、児童8名を一つのグループとして、ガイドスタッフが引率し、会話しながら感想を引き出すといったものです。美術作品の鑑賞だけでなく、シビックプライドの醸成といった見地から、美術館の建物の見学や美術館からの市内眺望も楽しみます。参加した子どもからは、「もっと見たい」「また行きたい」との声が数多く聞かれ、実際に、ミュージアム・ツアー後に家族で訪れた子どもたちもいるようです。今年度は、残念ながら9月まではコロナウイルス感染症予防のために中止をしています。

研修会も今年には中止になりました。しかし、本市では図画工作科教育の授業時間はしっかりと確保されています。

そこで、本校としては、この写真にもあるように、友達との距離を取りながら「つくりだす」ことに取り組ませています。2カ月半の休みがあつての学校再開で、思わぬことがありました。それまで、図画工作科の学習に対して苦手意識をもっていた子どもも生き生きとした表情で活動に取り組む態度が見られたことです。これはどの学年の子どもにも言えることでした。今までの学習形態は小集団にし、表現活動の刺激を合っていました。コロナ禍のため、個人表現が主になり、どのように表現をしたらよいかわからない、という子どもが増えるのでは、と危惧していたのですが、全く違い、出来栄を気にするよりもまずは、表現できることにうれしさを感じているのです。全学年が黙々と自分の作品づくりに熱中している姿がそこにありました。

コロナ禍だからこそ、図画工作科の学習が必要だと確信しています。

(とやま・のりこ)